焰硝の生産

かつて白川郷の主要産業の1つは、火薬の原料である硝石という鉱物を原料とした焰硝（硝酸カリウム）の生産でした。焰硝の製造に必要な技術は近隣の五箇山から伝わりました。五箇山では1543年にヨーロッパから火縄銃が伝来して以来、焰硝の生産高が飛躍的に伸びていました。

村人たちは合掌造り家屋の囲炉裏の下に、深さ最大2メートルの穴を掘ってそこで焰硝を作っていました。穴の中には、ワラ・土・ヨモギ・蚕糞などの材料を混ぜたものを溜めて放置しておき、3~4年間発酵させていました。時間が経つにつれて、微生物の硝化作用により硝酸カルシウムを含んだ土壌が出来上がります。こうして出来た土壌は、白川郷に3カ所あった認可を受けた精製所に運んで売ります。精製所では土壌を水と混ぜ、加熱して成分を濃縮し、精製して液体の焰硝を生産していました。それから液体を濾過し煮詰めて濃縮してから冷ますと、焰硝の結晶が出来上がります。

精製所では、遠くは大阪まで様々な藩や商人たちに焰硝を販売していました。焰硝の生産は、明治時代（1868年~1912年）に安価な代替品がチリから輸入されるまで栄えましたが、その後は生産量が減少していきました。